

随 想

優秀な外科医とは：
「水影心」を会得せよ

名誉教授 小川 修



40年前になりますが、京都大学医学部の卒業を前に進むべき専門の診療科を選ぶ必要がありました。医師となる限りはメスをもって患者さんを救いたいという気持ちがあり、所属していた医学部ラグビー部の顧問が泌尿器科の教授（現天理医療大学学長：吉田修先生）という縁もあって泌尿器科を選択しました。以来、外科医として泌尿器科診療に携わってきましたが、外科医という技術系プロフェッショナルがどうあるべきかを常に考えてきました。世の中にはプロスポーツを含め、たくさんの技術系のプロがあります。その中で、外科医というプロには「極めて練習がしにくい」という特殊性があります。外科医教育において“See One, Do One, Teach One.”という言葉がありますが、「少ない経験でも人に教えられるくらいのレベルに達しなさい。」という外科医の特殊性をうまく表現した名言です。

「スーパードクター」としてテレビなどで紹介される医師のなかで経験症例数を自慢する外科医を時々みかけます。しかし、私が知っている優秀な外科医には症例数を自慢する医師はいません。マイナー外科といわれる泌尿器科ですら、上は腎臓、下は精巣、陰茎まで、泌尿器科医が行う手術の種類を数えるとゆうに100は超えると思います。その一つ一つを数十という単位で経験することなどとうてい不可能です。また、時には見た事も無いような巨大な腫瘍（お腹の奥のほうに出来る悪性の肉腫などです）を、これまでの経験を総動員させて手術しなくてはならない場合もあります。私自身、経験数の重要性を否定する訳ではありませんが、真に優秀な外科医は、少ない経験でも見事なパフォーマンスを発揮しているのです。

それでは、優秀な外科医になるにはどうしたら良いか。これは私自身への戒めでもあります。一つ一つの症例経験から最大限の自己フィードバックを行う努力をすること。他人の経験でさえ自分のものとして消化出来る感性を持つこと。そして、同じ過ちを決してしない覚悟を持つことだと思います。

私が研修医の頃、少年雑誌に連載されていたアニメ「北斗の拳」を毎週楽しみに読んでいました。このアニメの主人公、ケンシロウの使う奥義のひとつに「水影心（すいえいしん）」があります。この奥義は一度戦った相手の技を次からは自分のものとして使うことが出来るというもので、まさに外科医が身につけるべき技です。教授就任以来、若い泌尿器科医には「水影心を会得しなさい。」と言いつけてきました。最近は手術用シミュレータの開発も進み、“See One, Do One, Teach One.”から“See One, Simulate Many, Do One, Teach One.”と言われるようになってきています。しかし、今後も外科医にとっての「水影心」の重要性は、決して色あせることは無いでしょう。

（おがわ おさむ、令和3年退職、元大学院医学研究科教授、専門は泌尿器科学）

[目次に戻る ↗](#)